胸鎖乳突筋に発生した Elastofibroma

宮嶋 義巳¹⁾²⁾・田中 信三¹⁾・山口 勝矢¹⁾
中野 龍治²⁾・柏木 彰一¹⁾²⁾

Elastofibroma of the Sternocleidomastoid Muscle

Yoshimi Miyajima, Shinzo Tanaka, Katsuya Yamaguchi,
Shoichi Kashiwagi and Ryuji Nakano
(Kurume University)

A rare case of elastofibroma of a sternocleidomastoid muscle is reported. The patient was a 71-year-old male who had had a swelling on the left side of his neck for 5 years and hypokinesia of the left upper arm. He was born in Ohmuta city, Kyushu, Japan and had been a fisherman for 40 years. The tumor was elastic hard, 15×6 cm in size and located in the left sternocleidomastoid muscle. Elastic material and degenerative striated muscle were seen in the biopsy specimen. After resection of the left sternocleidomastoid muscle, including the tumor, his complains disappeared. The patient had no evidence of disease 7 months after surgery. The etiologic factors of this tumor were inferred to be constitutional predisposition and reactive hyperplasia.

Key words: elastofibroma, sternocleidomastoid muscle, neck neoplasm

はじめに

Elastofibroma は、主として肩甲下部に生じる比較的稀な良性腫瘍である。最近、我々は慢性に経過した頸部腫瘍で発症し、比較的診断が困難であった胸鎖乳突筋の Elastofibroma を経験したので報告する。

症 例

症例：71歳，男性。

主訴：頸部腫脹。

既往歴：1975年十二指腸潰瘍，その他特記すべきことはない。

家族歴：特記すべきことはない。

職業歴：■

出身地：福岡県大牟田市。

現病歴：1988年頃に左側頸部の腫脹と左手が上げにくいことに気付いたが、放置していた。1992年11月頸部腫脹が急激に増大し、左手のしびれと挙上困難が増強した。11月26日近医整形外科を受診し、頸部腫瘍を指摘され当科に紹介された。

初診時所見(図1)：左耳下部から左鎖骨上窩にかけて 15 cm×6 cm の硬い腫瘍を触知し、周囲との癒着がみられた。鼻腔、咽喉頭に異常所見はなく、リンパ節は触知しなかった。

1) 久留米大学医学部耳鼻咽喉科学教室

2) 久留米大学医学部病理学教室第2講座

検査所見: MRI (図2)で左胸鎖乳突筋部に広範な結節様の high intensity area を認めた. 血液生化学検査では異常所見を認めなかった.

経過: 1992年12月8日に局所麻酔下で頸部腫瘍の生検手術を行った. 胸鎖乳突筋前縁に沿って皮膚切開を加えた. 胸鎖乳突筋の著明な腫大

を認め, 後縁が白色で癥痕化していた. このため, 胸鎖乳突筋の一部を採取し病理組織検査を行った. H. E. 染色(図3)で横紋筋の変性と周囲組織の線維性増殖を認めた. Elastica van Gieson 染色(図4)で横紋筋周囲の線維組織は球状および数珠状で黒色に染まった. 病理組織診断は Elastofibroma であった.

12月24日腫瘍摘出術を行った. 全身麻酔下で胸鎖乳突筋前縁に沿って生検時の皮膚切開を延長し, 広頸筋を剝離し, 胸鎖乳突筋全体を明視下にした. 胸鎖乳突筋は腫脹が著明で, 白変し, 硬化していたため, 耳下部と胸骨鎖骨の付着部で切除し全摘出した. 中内深頸リンパ節の腫脹を認めたので摘出したが, 病理学的に異常は認

図1 正面像
左側頸部の腫脹を認める.

図2 MRI T2 強調像
左胸鎖乳突筋に沿って広範な結節様の high intensity area を認める (矢印).

図3 HE 染色
横紋筋の変性(M)と周囲組織の線維性増殖(E)を認める.

図4 Elastica van Gieson 染色
弾性線維が球状および数珠状に染まっている (矢印).

めなかった。

術後、手のしびれと挙上困難は軽快した。
1993年7月現在再発は認めていない。

考 察

Elastofibroma は、1959年に Jarvi¹⁾が肩甲下部に発生した4例の腫瘤を報告し、1961年に elastofibroma dorsi と命名したのが最初である。しかし、1966年に Barr²⁾が左大転子部の Elastofibroma を報告し、Elastofibroma と呼ばれるようになった。Elastofibroma の特徴は、発病年齢が中年以後に多く、男女比は1:9で女性に多いことである。また症例の多くは長期間に及ぶ農業、漁業、林業での重労働歴を有し、本邦では、九州、特に沖縄、鹿児島での報告が多くみられる。

発症部位の頻度は、長嶺³⁾の報告によると、170例中139例(81.8%)が肩甲下部のみに発症し、27例(15.9%)が肩甲下部と肘頭下部に、その他三角筋部、坐骨結節、大転子部にみられる。肩甲下部以外での単発症例^{4)~9)}は10例で、頭頸部に限ると頭蓋内で2例⁷⁾、頸椎の硬膜外で1例⁸⁾、項部の皮膚で1例⁹⁾の計4例のみである。本症例のように頸部単発の症例は稀で、胸鎖乳突筋に発症した例は我々の渉猟し得た範囲では見当たらなかった。

Elastofibroma の成因は、肩甲下部では肩甲骨と肋骨弓との摩擦が考えられており、機械的刺激による反応性増生であるといわれている¹⁾³⁾。また、ほとんどの症例が沖縄、または九州出身者であり、家系内発生も報告されていることから、遺伝的素因が考えられている⁵⁾。本症例も出身地が九州であったことから、Elastofibroma が発症する遺伝的素因をもっていた例であったという可能性がある。また、40年余り漁業で重労働を行っていたので、何らかの慢性的な機械的刺激が長期間にわたって胸鎖乳突筋に加わったことも本疾患の成因にかかわっていたと考えられる。

本症例の症状に手のしびれと上肢の挙上困難が生じた機序は、手術で腫瘍を摘出した直後に

症状が消失したことから、腕神経叢の圧迫が最も考えられる。

本疾患の臨床経過では、徐々に増大する無痛性の頸部腫瘤ということで、他の腫瘍性病変との鑑別が重要である。本報告例でも、術前にCT、MRI検査などを行ったが、診断を確定することができず、生検を行わざるをえなかった。

頸部腫瘤の症例でも、九州出身で長期間の重労働歴がある場合には、Elastofibroma も鑑別すべき疾患の1つであると考えられた。

謝 辞

御校閲いただいた久留米大学医学部耳鼻咽喉科学教室平野実教授に深謝致します。病理学的診断にあたり御協力頂いた久留米大学医学部病理学教室第2講座森松稔教授ならびに九州大学医学部病理学教室第2講座恒吉正澄教授に心より御礼申し上げます。

本論文の要旨は第19回日耳鼻北部九州連合地方会(1993年7月)で発表した。

文 献

- 1) Jarvi O and Saxen E : Elastofibroma dorsi. *Acta Pathol Microbiol Immunol Scand* **51** : 83~84, 1961.
- 2) Barr JR : Elastofibroma. *Am J Clin Pathol* **45** : 679~683, 1966.
- 3) Nagamine N, Nohara Y and Ito E : Elastofibroma in Okinawa. *Cancer* **50** : 1794~1805, 1982.
- 4) 長嶺信夫, 野原雄介, 伊藤悦男 : 肩甲下部以外に発生した弾性線維腫(Elastofibroma)の臨床病理学的検討. *臨整外* **14** : 282~289, 1979.
- 5) 長嶺信夫, 宮城 靖, 遠藤 巖, 他 : 弾性線維腫(Elastofibroma) —21症例の臨床病理学的検討—. *癌の臨床* **23** : 203~213, 1977.
- 6) 内野正文, 狩野利之, 周郷延雄, 他 : Intracranial elastofibroma の1例. *CT研究* **12** : 439~443, 1990.
- 7) Ebels EJ and Go KG : A presumably unique intracranial tumor (elastoma). *Clin Neurol* **77** : 20~25, 1987.
- 8) Prete PE, Henbest M, Michalski JP, et al : Intraspinal elastofibroma. *Spine* **8** : 800~802,

1988.
9) Nodl F : Elastofibroma cutis. Hautarzt 30 :
577~580, 1979.

（原稿受付：平成 5 年 9 月 20 日
原稿採択：平成 5 年 12 月 8 日
別刷請求先：宮嶋義巳
〒830 久留米市旭町 67
久留米大学医学部耳鼻咽喉科学教室）